

Yokosuka Social DISCUSSION 2020

IT技術・情報格差問題分野 実施レポート

(1) イベントを運営しての感想

初めてのイベントの運営でとても緊張していました。オープニングやクロージングなど練習は重ねていましたが、当日の予定変更などもありイベント運営の難しさを感じました。準備の段階では、広報活動などがあまり積極的に出来ずこれからの課題だとも思いました。

(2) ディスカッションを通しての感想

初めてのファシリテーションの経験であり、私は人前で話すのが苦手ということもあり当日はとても緊張しました。自分が中心となり議論するときにはできるだけ色々な人に話を振って多様な意見が出るように心がけるなど円滑に進めるため様々なことを心掛けたつもりでしたが、途中でつまってしまったり止まってしまったりするなど自分の準備不足や力不足を体感しました。しかし、参加者の方々が暖かく協力してくださったので議論を進めて行くことができました。また、様々な人から意見や発想を聞くことで自分の知らなかったことも多くとても勉強になりました。

(3) IT技術・情報格差問題分野 実施レポート

私がこのテーマでディスカッションをした理由は、新しい技術で便利になっていく一方、様々な理由によりそれらの技術を扱えない人は相対的に不利益を被る現状を改善したいと考えたからだ。私は将来ITに関わる仕事をしたいと考えており、それに関係することを社会問題という視点から考えるとこのような問題が見えてきた。このような課題を解決するために私は以前の小論文で年齢間の格差を改善するためには地域が補助する形で世代間の交流を促すことで、情報やITに関する技術の習得の機会をあらゆる人が得られる場所を作っていくことが必要なのではないかとかんがえた。様々な原因によってこのような格差が発生すると考えられるが、今回のディスカッションでは年齢間、特に高齢者の方についてが主な議論の内容となった。

ディスカッションでは他の市での高齢者の人などにスマートフォンなどを教える仕組みや韓国でのそれに似た仕組みについての話が上がり、それらを参考に考えていく中でどこが主導で進めるにせよ地域単位での活動が信頼の築きやすさや動きやすさ等の理由で主になっていくのではないかという意見が生まれた。誰がやるのかという問題に対しては、その地域の学校と協力して学生との交流を設けるというアイデアがあった。また、新しい視点として身体的な理由によりスマートフォンなどの情報端末を使うことが難しい障害をもった方々などの問題も存在するということが見えてきた。

このような議論から、年齢間での情報やIT技術の利用などの格差を改善するためには地域が主体となって積極的な学習の場を提供する仕組みが必要なのではないだろうか。